

シンポジウム報告

スポーツ史学会第34回大会シンポジウム報告

Reports presented at the Symposium
of the 34th Annual Meeting of Japan Society of Sport History

スポーツの世界史を考える

—— 文明化の使命、帝国主義、ポストコロニアルの視点から ——

Discussing the World History of Sport
— Civilizing mission, Imperialism, and Postcolonialism —

開催日 : 2020年12月5日(土) 15:10~17:55 (オンライン)
シンポジスト : 川本 真浩 (高知大学)
高嶋 航 (京都大学)
藤川 隆男 (大阪大学)
コーディネーター : 石井 昌幸 (早稲田大学)
司会・趣旨説明 : 佐々木浩雄 (龍谷大学)

シンポジスト紹介

川本 真浩氏 (高知大学人文社会科学部教授)

専門はイギリス帝国=コモンウェルス史。著作に「ローンボウルズの「来歴」再考」『海南史学』55 (2017年)、「1930年代のエンパイア・ゲームズ開催地をめぐる言説—オーストラリアの新聞にみる報道、論説、見解を中心に—」『高知大学学術研究報告』64 (2015年)、「「創られた伝統」としての長距離走—植民地ケニアにおける陸上競技小史」『高知大学学術研究報告』63 (2014年) など。

高嶋 航氏 (京都大学大学院文学研究科教授)

専門は東洋史、東アジアのスポーツ史。著作に『スポーツからみる東アジア史: 分断と連帯

の二〇世紀』(岩波書店、2021年)、『帝国日本と越境するアスリート』(塙書房、2020年、共編著)、『国家とスポーツ: 岡部平太と満洲の夢』(KADOKAWA、2020年)、『軍隊とスポーツの近代』(青弓社、2015年) など。

藤川 隆男氏 (大阪大学大学院文学研究科教授)

専門はオーストラリア史。著作に「メディア・スポーツ複合体とオーストラリアのカントリー・フットボールクラブ」『関学西洋史論集』42 (2019年)、『妖獣バニヤップの歴史—オーストラリア先住民と白人侵略者のあいだに』(刀水書房、2016年)、『人種差別の世界史—白人性とは何か?』(刀水書房、2011年) など。

シンポジウムの趣旨説明

<佐々木>

今大会のシンポジウムは、「スポーツの世界史を考える：文明化の使命、帝国主義、ポストコロニアルの視点から」と題し、シンポジストとして3人の先生方をお招きしました。シンポジウムの趣旨は発表抄録集に記載したとおりですが、このテーマを設定したねらいについて少しお話しさせていただき、その後に登壇者の先生方の紹介をさせていただきますと思います。

まず、この企画は2018年9月に一色出版から刊行された『スポーツの世界史』という本に触発されたものです。編著者の坂上康博先生、石井昌幸先生、中房敏朗先生、高嶋航先生はいずれもこの大会に参加していただいておりますが、うかがったところ、執筆者で集まって議論をする機会はなかったということでしたので、ぜひ機会を作ってお話しをうかがいたいと考えた次第です。

この本は20名の研究者が序章・終章を含む23章にわたって世界各国・各地域のスポーツを、近代史を中心に描いています。スポーツ史の本としては、ありそうでなかった本だと思います。それぞれの地域のスポーツを、専門性をもって通観的に描くことができる研究者は限られているということも、こうした本がなかった理由の一つではないかと思えます。個人的には各章とも新しい発見が多く、たいへん興味深く読ませていただきました。

私たちスポーツ史を専門とする者のあいだでは、近代スポーツがイギリスやアメリカでルールを整え、世界各地に広がっていったことは共有されているわけですが、それらが各地でどのように展開し、現在に至っているか、そこにどのような学問的関心呼び起こさせる問題が横たわっているかについて詳しく把握できているわけではないと思います。本書ではそれらが、それぞれの国や地域の特徴をふまえて提示されています。

これまで私たちの学会では十分におさえられていなかった地域も描かれており、スポーツ史以外の研究領域を専門としている方々が執筆者に加

わっていることも目を引きました。これは、今回のシンポジウムのように、他の研究領域の方々と交流のきっかけになるという意味では喜ばしいことですが、同時に、スポーツ史学会として特定の国・地域に研究が偏りつつある点も指摘できます。

多様な歴史的・社会的状況を把握していこうとするなかで、本書が示していることのの一つは、それぞれの国や地域の特色とともに、ナショナリズム、アイデンティティ、植民地、民族、階級、国民統合、ジェンダー、人種といった多くの地域に共通する問題です。

これらの視点によって、アジア・アフリカ・オセアニア・南米への欧米諸国からの影響という共通点とともに、比較史的視点によって各国・各地域の歴史的個性が浮かび上がります。そこには多様な受容と葛藤の姿が映し出されるわけです。本シンポジウムでは、この各地に共有される視点のなかから、「文明化の使命」「帝国主義」「ポストコロニアル」というキーワードを念頭に置いていただきながら、発表していただくことにしました。個々の研究でフォーカスされていることとともに、今後どのような「スポーツの世界史」が可能なのかについて考える機会にさせていただけたらと思います。

本日は、『スポーツの世界史』で、アフリカの章を担当された高知大学の川本真浩先生、中国およびフィリピンの章を担当された京都大学の高嶋航先生、オーストラリアの章を担当された大阪大学の藤川隆男先生に登壇いただきます。

川本真浩先生は、イギリス帝国史、コモンウェルス史がご専門ですが、本書では、アフリカ大陸を担当されています。ヨーロッパ列強の影響を受けながら受容されるスポーツ、その後のアフリカ諸国のプレゼンスの向上、人種差別問題などを取り上げながら、スポーツを通じてアフリカをみる際の視点の持ち方とともに、その研究フィールドとしての魅力・豊穡性をお伝えいただいております。今後、スポーツの方の研究も継続していただけるのではないかと期待しているところです。

高嶋航先生は、東洋史・中国史を専門にされておりますが、近年、スポーツに関する著作を数多く刊行されております。ちょうど先頃（2020年12月）に最新の編著書となる『帝国日本と越境するアスリート』が出版されたところです。『スポーツの世界史』ではフィリピンと中国の章を担当されており、今回は中国へのYMCAの影響についてご報告いただきます。

藤川隆男先生は、オーストラリア史がご専門で、オーストラリアの文化そしてスポーツにも精通していらっしゃいます。『スポーツの世界史』では、イギリスの影響や先住民の文化との融合あるいは抵抗の動きなどを視野に入れながら、オーストラリアのスポーツの多様性について叙述されました。今回はオーストラリアン・ルールズ・フットボールをクローズアップし、グローバル化におけるメディア資本の影響などを含めた近年の状況までについてふれていただけるようです。

また、本学会の会員でみなさまご存知のとおりイギリス・スポーツ史を専門とされている石井昌幸先生にコーディネーターをお願いしました。3名の先生方のご発表の後に、議論の整理や問題点の抽出などをお願いしております。3つのご発表内容をふまえて石井先生の方からシンポジストに質問等をしていただき、答えていただく形で議論を深めていただきたいと思います。